



びーどろ

木屋 亞万

赤い車

信号が立っています
青い光を放っています
不自然なほど続く直線に、等間隔に立っています
そこを一台の車が走ります
おもちゃみたいな赤い車です
後ろに引いてネジを巻かなくても走ります
辺りはアスファルトのようにほの暗いです
朝が近いのかもしれませんが、暗闇ではないのです
ぼんやりとした朝の最先端に青が点点と光ります
音はありません、効果音を入れてあげたいくらいに静かです
ものがたくさんあるのに音がないというのは迫力があります
すべてがおわってしまったようなかなしみもあります
その悲しみは朝を呼びます
朝はきっと新しさに満ちていて、元気のある人たちが動き出します
赤い車の曲線美に、眠る女性のパジャマ姿を思い浮かべます
てんてんと立つしかない信号に男の純朴さを感じます
車は真四角にはなりません、信号は歩きません
車と信号が交わることを人は事故と言います
青い光は時に赤く赤く染まります危険な色です
危険を犯して車と車も交わります交通事故と言います
かつて姦通・密通は罪でした、交通はどうなのでしょう
信号はどっちつかずの黄色を燈して逃げようとしています
高速道路には等間隔に黄色い電灯が並んでいきます
川に写る灯りが美しいのは、川面が揺れているからです
高速道路を赤い車が走ります
フロントガラスを黄色い光の球が流れていきます
高速でいくことにどれだけの意味があるのだと問うています
空は一面の曇り空です、雲は雲であることをやめたように平面です
車は浮ついています、空は飛びません
雲が押しえつけているのです、大地が吸いつけているのです
赤い車に吸い付きたくなるのは、なぜでしょうか
誰にもわかりません

言葉は風景を紡ぎます、人を描きます、心を映します
この詩は隠喩のようです
この詩に意味はありません
何の伝達事項もありません
あなたが読むかもしれません
誰も読まないかもしれません
あなたは忘れるかもしれません
誰も覚えていないかもしれません
でも確かにここに一篇の詩があります

赤い車が走っています、等間隔に青い信号機があります、黄色い電灯があります、
空は一面灰色です、暗闇は終わりつつあります

ぷらちな

カーテンの隙間から伸びる
白い光の筋をたどって
窓の外へ出てみたら
青々とした緑の芝生が
朝露に濡れて笑っている

裸足のままでその上を
歩けばきゅっきゅっと足の裏
草の葉と根が撫でていく
土もしっとり湿っていて
朝の活気に満ちている

私が外に出るのを
待っていたかのように
ひとつ大きな風が吹く
しゃらしゃら笑う声がして
見上げれば揺れる木の梢
枝葉が揺れて楽しげな
朝の会話がここまで届く

おはよう
今日も朝が来た
あたらしい光
こちよ風
みずみずしい草木

小さな銀を散りばめたような
景色が朝を彩っている

ダイヤ乱夢

雨の降る日、電車が遅れて
まだアナウンスを聞いていないあなたは
いつものように向かいのホームにいる
今日はそのホームじゃないと
隣であなたの友人が叫ぶ

あなたはこちらを見た
雨の向こう側
あなたが友人を見る視界に
私は入ることができただろうか

屋根があるところには
雨は降らないと思っていた幼少期
好きな人ができたら
いつか知り合えると信じていた青年期

あなたは向かいの階段に消え
手前の階段から現れる
こちらに歩み寄り
友達と合流する

妙な執着は迷惑だろうから、私は
通学の時間を合わせるだけ、にした

耳元のイヤホンでは音楽が空回り
雨は止む気配がなく、電車は来ない
電光掲示板の隅の赤い数字が増えていく

名前を呼ぼうとしても
声を聞こうとしても
あなたは遠い
私は知らないのだ
名前も声も

夢の中で私の知っているあなたが
何度も何度も現れる
それが決まって駅なのは
私が電車よりも遅れていて
どこかでとまったままだから

生きると死ぬなの違いなんて考えたことがなかったのに
生きると歌う音楽が私の背中を拳で叩く
私が復旧する頃にはあなたは
まだ駅にいるのだろうか

各駅停車で、春に向かう

春へと旅立つ

厚い氷のトンネルを抜けるたび
金属の車輪が鶯の鳴き真似をする
繋がって泳ぐ魚は駅に出会うたび立ちどまる

雨水が硬い表皮を滑り落ちる
やさしい雨の季節だ
ちいさな水の粒子に包まれて
草木もみんな子どもに戻る

本の虫さえ外の世界への戸口を開く
開かないはずの窓をあければ
白黒の世界が桃色の泡を吐いていた
キャベツ畑の横を過ぎれば青虫さえも羽を持ち
白い糸で織られた手紙

春に着いていたのだと分かったのは
朝の雀の笑い声を夢の最中に聞いたから
立ち止まる女の上に降り注ぐ薄紅色の花弁の雨
風は冷たく山の端の陰で歯軋りをして
雷鳴は冬の静かな怒りと共にある

清潔な活力を持つ朝の日を浴びて徹夜明けの月さえ白い
花で満ち溢れる世界を通り過ぎることが惜しい
華やかな風景を背に入れ替わる
乗客たちの背中と横顔
花を散らすたびに雨はすまなそうに虹を残した

花が咲くことさえ過ぎ行くこととして
雨を浴び青い芽を吹いて草木は萌える
朝はもう寒さの欠片もなくなって
座る牡丹ともうじきにつかまり立ちを始める芍薬

オーバーイージー

彼女はまだ温かい
フランスパンを
冷えた腕に抱えながら
川沿いの坂道を
一気に駆け上がる
街路樹は春に芽吹き
風は冬のまま
もうすぐ朝が来る
空は濃紺から薄い青へ
雲が暗く影を残す
髪を流れる黒く鈍い光

少しずつドアが開く
フランスパンが覗く
後ろで束ねた黒髪に
グリーンのカーディガン
困ったような目で笑う
パン屋が混んでいたの
珍しいでしょと口が笑う
キッチンへ消えていく
後ろ姿は暖簾の向こう
ブルージーンズが歩く

パンを三等分した後
切り込みを入れて
レタスにトマト
薄く切ったチーズ
挟み込んでいく指先
赤く凍えている指
手を取って温めようと
したら起きてくる息子
日曜だけは早起きらしい

彼女は缶詰を開けて
コーンスープを作り出す
僕は目玉焼きを焼く
油を引いたフライパンに
ベーコンを3枚敷いて
卵を3つ割り落とす
コショウをかけて
水を入れて蓋をする
三つ目が見つめる
サニーサイドアップ

日曜はいつもランチで
ゆっくり話しながら
優雅な食事をする
これで豪華なんだから
高が知れてると笑う彼女
スープの鍋を混ぜている
息子は牛乳を入れている
僕は絶妙なタイミングで
フライパンの蓋を取る

はるのうみが見たいと
チビの息子が言うのなら
僕らはそれに従うのみ
今日は海へ行こう
彼女は紅茶を3つ
マグカップに入れて
残りを空色の水筒に注ぐ

今日は曇りらしいな
朝は晴れていたのにね
たいようはさっきやいて3人で食べちゃったもん

チビを肩車して
彼女の手をしっかりと握り
僕からドアを開く

それは終わりのドア
開く隙は午後の2時
夢から覚めた昼下がり
カーテンを開けると
外には買い物帰りらしき
女性が一人バッグから
フランスパンを出して
川沿いを歩くのが見える

フライパンの蓋みたいに
空は曇っている
僕は現実のドアを
絶妙なタイミングで開け
彼女に挨拶をする
まだ風が冷たいですねと
柔らかく話し掛ける
もうすぐ春が来る

ボタンを押したら

君はポロシャツを着ている
襟のところから三つボタンがあって
君は一番下しか留めていない

君はだぼっとしたジーンズを履いていて
その膨らみの中にまだ春を隠していた
もうすぐ夏も逃げ込んでくる

君と僕の間には四角い木のテーブルがあって
アイスコーヒーのグラスが汗をかいている
薄着の僕らにはこの店はすこし寒く思える

君はさっきから何かを話している
趣味に仕事に人間関係
僕はそれをほとんど聞いていない

ただ君の胸のボタンを見ている
ポロシャツの上から三つ目のボタンを見ている
指をついっと出してそのボタンを押したい

もしも僕がそのボタンを押したら
君はどうするだろう
春は君のズボンから逃げ出すかもしれない

もしそのボタンを外したら
グラスはもっと汗をかくかもしれないし
楽しかった夏はいよいよ終わってしまうかもしれない

木漏れ日カメラ

日曜日に朝から起きているときは
誰かのために生きているときだ

カメラを首から提げて、僕は君にぶら下がっている
今日の京都は余所行きの顔
君も1時間級の化粧で、休日用の匂い
社会と休戦中の君は、僕の影から髪をぎゅっと掴んで、ぐいぐいと引っ張っていく
僕はイテテとその遊びに乗る

十字路の真ん中でふと立ち止まり、カメラを構える
こちらを見ていないひととき
カメラに気づかれたときに、もうシャッターは切られている

心のなかの腐りかけた水分をすこし新鮮なものに変えた人たちで溢れる街
あみだくじの線より濃密にすれ違う人々に、ドラマも出会いも訪れない
袖を触れ合う人が多すぎる
袖から先がつながりあわなければ、縁とはいえないのかもしれない
君と袖がつながりあう影をフィルムに収める

街路樹は櫛、新緑がすこし擦れてきて、とても強い緑になる
木漏れ日がキラキラと影を作って、アスファルトに光を映し出す
ぎらぎらの太陽ばかりのプラネタリウム

何度も何度もシャッターを押す
フィルムや写真は世界を焼き付ける
僕は心でも何度もシャッターを切る
心はいくつもの大切な思い出を大事に掴んで放さない
すぐには出てこないけれど引き出しには過去が大量に眠っている
そのどれもが容易く壊れてしまう
写真は紙ですぐに燃えてしまう、フィルムは光にさえ焦げて真っ黒になる
色も記憶も少しずつ褪せてゆく

風に揺れる木漏れ日
何度シャッターを切っても、世界は止まらない
休日の午前がいつのまにか午後になって
影に踊る光の粒が取り囲む、二人の影

木漏れ日の映写機に目を向ければ
枝葉の隙間から眩しい太陽の光が注ぐ
太陽がどれだけ世界の影を切り取っても、世界が脆くなることはない
太陽は今しか切り取らないし、今をどこにも残さない

僕らは地球にぶら下がり、地球は太陽にぐいぐい引っ張られている

忘れたくないということが僕の生きる意味のひとつだ
大切な笑顔を残すために僕は今日もシャッターを切る

彼女の手の平が押し出す白濁が
指の隙間から流れていく
少し力を込めた腕の強張りに
持ち上がる頬が顔立ちを整えていく
束ねてもらえなかった前髪が
目の鋭さを扇情的に遮っては見せ付ける

もっとゆっくりやってよと
ぼくが言うのだけれど彼女は
それではダメだというので
いつも僕のしあわせは
一瞬の白濁の中に流れ去ってしまう

だから僕は苦し紛れに
何度も何度もおかわりをして
胃がイカ飯になるくらい
白濁の半消化物で内臓を満たす

5時を過ぎて辺りが暗くなり始める頃
台所の蛍光灯をつけて、彼女は米を研ぐ
柔らかい手の平で
コツコツとした甲を押し広げ
細い指のわずかな隙間から
汚れた水を流していく

濁った水は早く捨てないと
お米が吸ってしまうのと彼女は言う
あなたの変な趣味には付き合っていないと
作業を熱心に眺めるぼくを尻目に
彼女は炊飯器にご飯を仕掛ける

彼女の研いだご飯は香り立つように甘い
ぼくは世界中のどの男よりも
この米に嫉妬し、自分もこのひと粒になりたいと思う
願わくは指の隙間から零れ落ちて
彼女の指に摘んでもらえる
ひと粒になりたい

ちなみにその前は洗濯機で激しく回され
乱暴に揉まれ、冷水と泡を浴びせられる
洗濯物にも憧れていた
願わくは彼女のTシャツになりたかった

彼女はぼくを変態だと笑って
どうして恋人になりたいと素直に言えないの
と、静かにぼくを洗い流した

涙の落ちるところ

湿った砂の温度
掘るほどに水が滲んで
肌で感じて頬に触れる
潮風の温い感触
乾ききれない海草の匂い
思っていたよりも
生々しい身の回りのすべて
ひりひりと目に沁みるあれこれが
頭を取り囲んで白い泡で思考を埋める
我慢できずに恥部から漏れ出る
白い悲しみの塊がぼとりぼとり
穴の中へとうずたかく積み重なる
ごめんねと思いながら
悲しみを砂に吊って
海に逃げて涙を隠してしまう

ウミガメは卵を産むために生まれてきた産みガメだと
君がしたり顔で言ったものだから
ウミガメのウミは海に住んでるからだろうと尋ねたら
何を言っているのと言わんばかりに鼻で笑って
命という命すべてを生み出してきた海こそ「産み」じゃないのと言う
海は産みで海亀は産みガメで
海はひたすらにあらゆるものを産み続けてきたのだと

わたしたちも海から生まれてきた
涙があふれ出てくるところは
わたしたちの故郷の海だ
どれだけ遠く離れても
故郷の海から滾々と塩水が身体に流れ込んで
目からぼろぼろ零れ落ちるのだ
頭に海ができた男が昔話に出てきたが
心の奥深くに誰もが
未だに海を秘めている

君がこぼした一粒の涙が

落ちるところにある草が
うらやましくてたまらない

君の涙をその身に浴びて
丸い雫を滑らせて
ピンとした曲線を描く
その身体をすすぐのだ

やがて根に落ち着く
君の海の一滴が
その草葉に染み渡り
春には青い花を咲かせる

君の海の水を肺にがばがばと溜めて
生れ落ちる半分私で半分君の命が
うらやましくてたまらない
君の海をその身に蓄え
身体のだ真ん中に陣取って
中心と中心を管で繋いでいる
どうあがいても自然な形でつながり切れなかった
一時的な私たちの接続を笑うように
自然な形で生まれ出る
子どもが最初に泣くときに
涙が落ちるこの腕は
強くやさしい海でありたい

なんという幸運

封筒に花をつめて贈る
もう届くはずのない海の底
砂とコンクリートで満たされた場所で
白骨化した魚類たちと眠っている
赤いポストに届けたい

気取るつもりはないけれど
想いを物に変えて何かを贈りたい
浜風に乗って海面を流れていくのはいけない
贈るなら心臓に埋め込むくらいでないと

花を摘むとき指先は
物質でないくらいのやさしきで
包み込むべきなのだろう
風のようにさりげなく花びらを散らし
ひとつ残らず封筒で受け止めていく
樹木の柔らかな爪先で袋を満たす

口付けでもないのにチュンチュンと
飛び回りながら鳴いている野鳥の唇に
ごそりと花びらを奪われた
愛する鳥でもおるのかと尋ねたならば
そうではないと言う

中毒ではないのだが
温もりが不足していて
声を欲しているのだ
できれば天使に似た声で
柔らかい耳ざわりのものを

空気を突っつくように小鳥は続ける

密室で風は起きない
水槽に波は立たない
一人では寝られない
花無しでは死ぬこともままならない
死にたての花びらで
私の棺を満たしてください

ひとしきり想いを告げた鳥の子は
赤いポストの腹の中へ旅立っていった

あらかじめ僕はそのことを知っていたので
封筒に花を詰めていたというのに

とんだ早とちりだな君は
そう思いながら僕は
風のようにやさしく
息を吐こうとして
誤って涙をこぼした

なんという幸運と
海底から
一粒の
泡

心臓が止まると死ぬらしい

心臓が止まったら
私は死んでしまうらしい
動けと思わなくても動くけど
止まるなと思ってても止まる時は止まる
私は心臓をコントロールできない

心臓は身体の核
過剰に動くと辛そうに血を送る
心臓が早くなると息が苦しくなる
疲れ果てて眠っているときも
さりげなく血を送る
起こさないように
忍び足で血を送る

心臓は感情の核
おどろくとドキンと跳ね上がる
慌てるとトクトクと早足に
恋すればドキドキと昂って
泣いているときは蒸発するほど熱い

心臓が止まったら
私は死んでしまうらしい
身体は動かなくなって
心は停止してしまう
心臓が最後の砦

私は心臓をコントロールできない
外側から壊さない限り
内側からはどうしようもない
だけど止めたい訳じゃない
ずっと止まらないでいてほしい
もう私にはどうしようもない

心臓は時限爆弾
いつ爆発するかわからない
心臓が止まれば
心も体も粉々に
もう元には戻らない

誰が心臓を私に与えたのか
誰が心臓を操っているのか
そう考えると

自分ではどうしようもない
巨大な力が恐ろしくなる
神を信じてもいいような気がする
親に感謝してもいいような気がする
脳や無意識を過剰に評価してもいい気がする
まだ人間がわからないことの中に
心臓の鍵が隠されているのだろうか

心臓が止まると死ぬらしい
いや私も人から聞いた話で
ほんとうかどうか
確かめようがないのだけれど
どうやらほんとうのことらしいんだ

毛を舐める猫

朝、目覚めると妻がいなかった
身重で明後日には出産する予定だった
大きなお腹が隣から消えた
「好きだよ」と言うと「当たり前」と答える
あの妻がない

ふらりと朝の公園へ出向く
鳩が悲しそうに泣いている
痰が絡んだような、舌足らずな鳴き声
今朝急に寒くなったからほとほと落ちている蝉
どの骸も上を向いている

生物は死んでしまうと上を向くものらしい
水槽で白い腹を浮かべていた金魚の死骸を思い出す
考えないようにしようとしても、どうしようもなく妻の記憶が蘇る
妻も白くて大きなお腹をしていた
月明かりの下で私だけに見せてくれた張りのある艶やかなお腹
私はそのお腹が愛しくていつまでも眺めていた

妻が白いお腹をこちらに向けて眠っている
という日常の記憶すら悲しげな思いに侵されている
目を閉じている妻が死んでいるようで怖い
妻は連れていかれた
妻も子も死んだ

妻とはまだ連れ添って一年だった
子どもできて、幸せの絶頂だった
眉毛に火がつきそうだった昔の孤独も、自失もすべて嘘のようだった
嘘のようだった過去と現在が、寝耳に水を流し込むように逆転した
白いお腹の妻は今、親子の白い骨になっているのだ
私はその骨に再会することすらできない

だから私は自分の腹を見る
平らで、汚い自分の腹を眺め
まだ見ぬ我が子を
妻の美しいお腹を想う
すべては私の中で完結する
世界との繋がりは完全に絶たれたのだから

私を捨てた自分勝手な人間と
妻と子を連れ去った理不尽な人間を恨む
愛する妻と子の分まで

私は毛を舐めている

私は孤独だ

私みたいな猫は山ほどいるのに

私は不幸だ

この世は不幸な猫で溢れているのに

幸せを潰す人間達のせいで

私は毛を舐める

朝、目覚めるたび

腹の毛を舐める

そして「好きだよ」と言う

チャイルドロック

しあわせな手のつなぎ方をして
やさしいセックスをしていましたら、
ベイビーが生まれてきました
生まれる前から、この子はかなりの幸せものです

ベイビーを楽園に残してわたしは旅に出ました
それはとてもたいせつなことです
たくさんものを手に入れなければなりません
それは何よりわたしのためであり、楽園のためなのです

久しぶりに胸の中にこころを入れた状態で楽園に戻りますと
わたしの女神はどこかへ出かけておりました
ベイビーはいつの間にかすくすくと育ち
テレビの前で体育座りをしています

何かお話をしようと思ってもベイビーはわたしに見向きもしません
何か固定されてしまったようにベイビーは画面を見つめています
女神が帰ってきて、ベイビーの背中を開いて
キーを入力すると、ベイビーは天使のように微笑み、お帰りなさいと言いました

ベイビーじゃないわ、この子はもうチャイルドよと女神は微笑み、
一人にすると何をするかわからないから、ロックをかけておくのよと
それが当たり前のことのように言いました
彼女の指輪をチャイルドが口に入れたことが原因のようです

パパ、仕方ないよ、生きていくためには石になることも覚えないと
チャイルドは近代化された笑顔を見せて、わたしを諭しました
そうだな、仕方ないよなとうなずいて、わたしは
こころを胸から外して、ファーザーロックをかけました

海の遺影

夜になったばかりの砂浜に
喪服で佇む一人の女
黒いドレスに黒いハイヒール
光沢があるのは纏められた黒髪のみで
女の黒い部分のほとんどは
艶もなく影と夜に吸収されている

波打ち際にしゃがみこんだまま
女は数珠を左手に握り締め
右手の親指、中指、人差し指で
足元の砂を摘み上げた
その手を目の高さまで持ち上げると
海へ帰っていく波の中にそっと落とした

海が私の名を呼ぶまでは誰も私のことを呼ぶことはできない
これから私に与えられるだろういかなる金品も海の底に沈められているも同じ
その誓いを乗せて波は水平線へと引き上げていく

女の細い三本の指が再び砂を摘み上げる
持ち上げられた砂粒たちは
彼女の目から流れ落ちる涙の筋を見たはずだ
鼻の脇を流れ上唇から滴り落ちた涙は
すぐさま砂粒の隙間に染み込んでいった

これから先どれほど海が荒れ狂おうとも私はそのことを受け入れるだろう
奪われて困るたった一つの命はすでに奪われた
誰かの帰りを待つこともない、今更なにが思い通りになろうとも、既に遅い

もう一度だけ砂の粒を摘み上げて
女は立ち上がった
夏の夜に彼女の頬を三度流れ落ちた涙は
既に乾きの気配を見せている
最後のひとつまみを風に乗せるように海に放つと
彼女は海に背を向けて歩き出した

もうこれで海辺を訪れることは二度とないだろう
暗闇に溶けた海から、白い泡沫が波と共に生まれては消えてゆく
朝が来たら海は美しく輝き、夜は跡形もなく失われてしまうだろう

海は女の中に消えない影と夜を遺した
朝も昼も夜も黒い海のままで

女の自画像も萎びた黒い衣装のまま

眩しい思い出はその輪郭を丸くしながら海の底へ沈んでいく
海に降り注ぐ雹のようにいくつもの過去が海へ溶けていくのだ
その一粒ひと粒がこれから訪れるであろうどの物事よりも愛おしい
影と夜に紛れていく記憶の結晶が女を何より苦しめるので
彼女は自分の身体以外すべてを海に葬ることにした

はるうまれ

はるにうまれたやつは
ゆめみがちなやつがおおい

かぜはつめたいのに
ひざしがあたたかくて
ゆめをみるのにもってこいなんだ

だからか
はるにうまれたむしは
ひらひらおそらをとんでいる

だからか
はるにさくはなは
ゆめのようにはかなくさくよ

はるだから
かぜのないひだまりをさがそう
そこにはとびきりのゆめがあるよ

じてんしゃにのるよりも
あるいたほうがあたたかいよ

あるくよりも
とまっていたほうがあたたかいよ

さあ
ひだまりでねむろう
ゆめへとびたとう

このかたいからだが
ぱっくりとわれて
しろくてやわらかい
ところがさくよ

そんなゆめをみたんだ

はるだから

はるにうまれて
しまったからね

青空家族

駐車場にちゃぶ台があって
さも当然のこのように
家族がそれを囲んでいる
夕飯
一家団欒
座布団もない
ただ、ちゃぶ台だけ

楽しそうな会話
夕日が横顔を照らす
ひじきの煮物
秋刀魚に大根おろし
つやつやの白い御飯
ちゃぶ台しかないのに
どこから出てきたのか
皿や服を収納する
場所もなければ
冷蔵庫も炊飯器もない

息子の学校での活躍話を
熱心に聞いていた父親が
しげしげと眺めている
私に気付いたらしく
話と食事を終えて
こちらへやってきた

ちゃぶ台さえあれば
家族は大丈夫なんです
一緒に夕飯を食べる
家がなくても
テレビがなくても
別々に暮らしていても
このちゃぶ台が
僕らを家族にするんです

日が暮れてしまう
彼らは当然のように

それぞれの家に
帰っていく
駐車場の隅に
ちゃぶ台が
立て掛けられ

食器を抱えて
去ってゆく
母親の背中

夏をかう

裏庭で夏が入道雲を浮かべている
昔ながらの夏だから雲にも貫禄が出てきた
そろそろ伸び過ぎた部分を刈らなくてはならない

夏を見るたび、思い出すことがある

昔はどこも夏しか飼わなかった
父は私が幼いとき、
「秋や冬は乱暴過ぎて手に負えない
それに春はかわいいが繊細で育てにくい
すぐに死んでしまうよ」と言っていた

そんな時代も遠く過ぎて、さまざまな季節が人懐っこくなって
一般家庭の裏庭に飼われるようになった
昔は家庭で育てにくかった冬型の気圧配置も
品種改良を重ねてずいぶん間抜けな体型になった
秋の紅葉刈りのバリエーションも増え、
トイカット紅葉が現在の主流となっている

お隣では綺麗な青空が
黄金色の黄昏を華麗になびかせている
我が家の夏は夕立がてら植木に水をやり始めている
近所の季節園の目玉だった台風が、街に逃げ出して、
一般家庭の夏を暴走させているという話を聞いていたので、
今年中学に入ったばかりの長男が庭に出て、しっかり雲を見守っている

妻が息子の友達の母と電話をしている
話題は夏バテした冬将軍をどう安く世話するかの話らしい
北風小僧と一緒に育てると良いらしいと妻が言っている
「うちもね、そろそろ新しい季節が欲しいんだけど」と
こちらに視線を送ってきたので
私は気付かぬフリをして、雷起こしに意識を集中させた

ばしゃばしゃと音がして、大黒柱を流れる滝に
裏庭で飼っていた、つがいの鯉が登っていくのが見えた
ついに屋根まで登りきって、赤と黒の鯉のぼりになったようだ
窓の向こうをつがいの竜が泳いでいった
これからは二頭、瓦の波を押しよけるように生きていくことだろう

ひとしきり発電作業を終えた後、庭に出ると
疲れた様子の夏が裏庭で凧いでいた

お前も年を取ったなど言いながら
ぷつりぷつりと蜃気楼を剪定していった
隣で息子も見よう見真似で剪定鋏を動かしている
「死なないよね、夏」と息子は言った
夏は涼しい風を一つ寄こして、また凧いだ

隣の庭の夕焼けを眺めると、
夕陽に向かって竜の群れが飛んでいくのが見えた

「人間よりは長生きするさ」と呟いて、入道雲を抱きしめると
台風が無事保護されたという風の噂が聞こえてきた

盲目の象

裏庭に透明の象がいる
ばあちゃんはそれを知っている
他は誰も信じてくれない

夜、布団に身体を任せて
僕は透明になる
(つまり僕は僕を抜け出すんだ)
そして象に会いに行く

暗闇の中をそろりそろりと歩く
タンスや机に足をぶついたり
洗濯バサミを踏んだりすると痛いから

でも、どれだけ歩いても何もない事に
僕は気付いている
(足の感覚なんて置き去りさ)
けれど僕は手を前に出して恐々と歩く

そうしていると突然、温かい水に包まれる
(そこはもう象の身体の中なんだ)
(僕らは静かに溶け合うの)
恐怖は一瞬で安心感に変わる
(その瞬間が好きなんだ)
僕は生まれ変わる

耳を澄ませば、象の心臓が
海の始まりの音を立てる
羊の毛のように温かい水の中で
僕は「光」を忘れ物箱に入れる
(闇の中でそれは必要ない)

透明の象は移動している
すべてが眠る絶対零度の闇の中
原子も眠って動かない

夢の外には夢がない、と
ばあちゃんは笑った
ばあちゃんはもう象には会えないらしい
(大人が信じないのも仕方ない)

象はいつも裏庭で休んでいるから

会いたくなったら透明になって
裏庭の方に歩いていけばいいと
ばあちゃんは教えてくれた
(本当にありがとう)

6時に沈む太陽を見ながら
象の心臓の口真似をしていたら
目から小さな象が溢れてきて
僕は誰もいない家を飛び出した
(ばあちゃんの病院へ行こう)

(今日、
目から象が出たんだ、
ばあちゃん、

ばあちゃん、
早く帰ってきてよ)

星になること

宇宙へ打ち上がる星になりたい
ジェットエンジンなんていら
ない
魂を燃やして空へ
真っ直ぐに飛んでいく
塵ひとつ出さない

空を見ない人は気づきもしない
僕の旅立ち

太陽を背にどこまで飛ぼう
闇に飲まれ黒に溶けていく
太陽系を離れて銀河系を越えて
輝かない星に紛れる

星になったら
会いたい人がいる
たぶん僕を待っている

見上げるしかない星空の
厚い空気の膜の向こうで
じっと風を澄ましている
たくさんの黒を凝らしている

もう僕ではなくなった僕でも
それが僕だとわかってくれる
あの人に会いに行く
あの人
が星になったら
僕も星になるだけだ

ガソリンもガスも何もいら
ない
空を見上げてところを飛ばせ
宇宙はとてつめたくて
体温を捨てた身体には
とても心地が良いものなので

さみしいお昼

雲ひとつない空
地上ですら風が強い
空ではきっと誰も立ってられない

日陰の空気は金属のつめたさで
無防備になり始めた肌を冷やす
落ちぶれた冬の狂いかけた残酷

昼休みに弁当を
窓に向かって食べる
ひとり
ガラスは温かい陽射しだけを通す
窓が冬から守ってくれる

卵焼きにミートボール
唐揚げとプチトマト
ふりかけはのりたま
弁当の匂いはいつも
心をほっと和ませる

箸を入れると冷たいご飯も
汁にふやかされた唐揚げも
割れたプチトマトも
小さい頃からずっとごちそう

窓のガラスが風に押され
カタカタと枠が揺れる
陽射しがふっと途絶えて
空を見上げると
イワシの群れが
腹をギラギラさせながら
太陽をさえぎるように泳いでいる

あ、
と思って見ていたら
イワシの群れの後ろから
大きなクジラがやってきて
大口開けてイワシを食べた
窓はカタカタ揺れている

クジラの口が閉じるたび

イワシが散り散りになって
地鳴りのような風が吹く

ひとしきりイワシが食われ
クジラが去ると
元の陽射しが戻ってきた
何事もなかったように私は
弁当の続きを食べる

雲ひとつない空
あのイワシはきっと
クジラに追われながら
風に乗って海からきた

あの銀色の腹に触れば
春の空気のようにつめたい
食べればさみしい味がする

クジラがお腹に溜めていく
何匹分ものさみしさが
私のものより多いから
今日のお昼もひとりきり
クジラのように豪快に飯を頬張る
うん、だいじょうぶ

六角の箱庭

小さいながら我が家の庭には
大きな松の木が植えられていた
初夏の頃には松ぼっくりをつけるその木は
祖父によるとヒマラヤスギという種類だそうで
松ぼっくりのできる杉ということが
当時の私にはとても魅力的に感じられた
狭い庭をでかい顔して占拠している様子を
毎朝学校に行く前に見上げていたのを覚えている

朝は爽やかで頼もしいシーダ(我が家ではその木をそう呼んでいた)も
夜になるとおどろおどろしい様子で
風が吹くたびにゴオゴオと音を轟かせた
幼い私は、夜の門番を恐れて夜更かしをせず
良い子として日々を過ごすことができた

クリスマスにはシーダに電飾をつけ
大きなツリーとして夜の闇を照らした
どんなに寒い夜でもシーダを見ると温かい気持ちになれた
(それでもゴオゴオと怖い音はしていたけれど)
幼少期の思い出はいつもシーダが側にいた

私が小学校を卒業する半年くらい前
大きな台風が私の住む地域を直撃した
翌朝起きるとシーダは風に倒れていて
家の前の小さな道を塞いでいた
すぐにシーダは切られて処分されてしまった

人生最初の家族の死が庭の木だといえば
何も知らない人たちは笑うだろうが
私にとってシーダは家族であり、憧れの存在だった
何をすることもできず、ただ泣いている私に
祖父は一本の鉛筆をくれた
「シーダはね。この1本の鉛筆になったんだ」

祖父は倒れたシーダの一部を切り
その木材で小さなシーダを彫った
底の部分に穴を作り、鉛筆の後ろの消しゴムの部分に
指人形のように差し込んだ
「小さなシーダもやっぱり小さな庭に住むんだね」と
小さな鉛筆の庭を見ながら私は笑った

今でも我が家の庭には
シーダの切り株が大切に残されている
そしてシーダはデスクの隅で
六角形の箱庭から私のことを
ずっと見守ってくれている

涕涙温溶

永遠のひび割れていく音がして
半球は淵から欠けていく

美しいひとに抱きしめられ
全身でぬくもりを感じるまでは
生きていようと心に決めた
あの冬の寒い日
凍結した死の決意は
恋をしたときに
溶ける気配を見せ始めた

土砂降りの雨が
もう十数年降り続けている
私の胸元の世界で
画用紙で作ったような薄い私が
クレヨンで描いたような涙を流している

誰かが笑うたびに心臓が毛羽立ち
小声の会話を聞くたびに堪忍袋は切り刻まれた
私の世界の私の石像は酸性雨を一身に浴びて
ただの細長い岩へと変わった

私らしいものなんて
この世界には微塵も存在しない
私は誰かに似たものの寄せ集め
他のやつらもみんなそうだったらいいのにと
心のどこかで願っている

雪山の棒状化した樹氷の群れのように
曖昧な輪郭だけになった石像が並んでいる
寸胴な建物に暮らす人々の感情もずいぶん寸胴になった

点と点を結ぶ線が点の多さに辟易としてしまって
都会では点は孤立し
点はたまらず群れを作っている
線で結ばれることのない点の群れは
日々ぶつかり合い
空中分解を繰り返している

いつまでも果てなく続くと思っていた永遠は
ひび割れては欠け、欠けてはひび割れて

今にも壊れそうになっている

誰かに優しく抱きしめられるまで
死んでたまるかと思っていた
誰かに抱きしめられる可能性を前にすると
不意に死んでしまいたくなるようになった
雨粒が地に叩きつけられる音が絶え間なく響き、
石像は失われた目で涙を流し続けている

あおぞら

あおぞらにむかって
ほんはひらかれた
せかいのだれもが
てにとれるように

時間の波に押し流されることなく
権利の射程圏内から逃れて
生き残った言葉の集落は
門を開いて客人を待つ

このむらはぶじでした
あおぞらにむかって
ほんをひらきます
よんでください

本が私を呼んでいる
呼んでいる本を読んでいる
本の向こうにいた
言葉の持ち主を呼んでいる

せかいとつながることは
どういうことだろう
せかいをすることは
どういうことだろう

青空に向かって
言葉を投げてみよう
この窓からあの空へ
窓と窓をつなぐ空中の網へ

あおぞらにはうみもりくもない
だれのものでもない
ただつながっている
せかいをおおっている

私が言葉を紡ぐから
あなたは音楽を
あなたは絵画を
あなたは舞踏を
青空の上で合作を

せかいは
ひとつではないかもしれない
それでも
いくつものちいさなまどをつないで
みんなでひとつのあおぞらをつくろうよ

それでも

繰り返す毎日

何度も同じところを回り続けるペダル
チェーンでタイヤとつながって
前に進んで良く
毎朝同じ道を行くとしても

繰り返す毎日

いつも同じ時刻の電車に乗って
早足で乗り換えを済ませ
速度を落とさず建物の中
どこまでが線路かわからない

繰り返す毎日

決められた机に座り
昼が来るまでひたすらに
降り注ぐ作業に埋もれていく
日が暮れるまで水揚げされない

繰り返す毎月

口座にお金が振り込まれ
それを三十日かけて
じわじわ食いつぶしていく
底が見えたときの焦燥は空焚きの鍋

繰り返す毎年

盆と暮だけ故郷に帰り
年老いた家族と顔を合わせる
いつもの面々と酒を飲み
繰り返す日々の傷みを知る

繰り返す延々と

繰り返すくりかえす
表と裏を何度もなんども見つめながら
新しいことが少ない日々を
ひっくり返さず受け止める

それでも

開けたまま持ってもらえた扉が
台風が去ったあとの澄んだ空気が
やけに丸い橙の月が
じりじりと焼けていく途中の肉が
猛暑の中で冷房の効いた空間が

それでも
うまく発酵したパンが
微笑みながら差し出されたてのひらが
ぐっと体を押しあてられた温もりが
つま先から入る湯船のお湯が
すれ違いざまの懐かしい香水が

それでも
犬の肉球が
あかんぼうの微笑みが
いとしい人の鼻歌が
ウィンカーとラジオの音楽が
走り終わった汗に吹く風が

それでも
しあわせなのだ
おしえてくれる

恋と愛、なにが違うの？

君は歌う
恋をしたと歌う
恋は罨そして穴

青春の瓦斯が立ち込める部屋で
起こる小さな火花
乱雑な部屋に引火して
ちいさな私は燃え上がる
なにもかもが恋に焦がれていく

恋の炎がいつ消えるのか
まだ私がちいさいうちは
あっという間に燃え尽きる
寝て起きたら鎮火している
もっと幼い頃は火花がぱちぱち光るだけ
瓦斯の少ない頃なんか
燃えたとしても小火ばかり

恋は赤い
恋は炎
燃え上がる焦がす爆発する
恋は危険
落ちていく捕まる奪われる

私は歌う
愛していると歌う
愛は太陽そして水

愛はみずみずしい身体の中を
どくどくと流れる血潮
温もりを身体中に届けて
汚いものを受け取る
静かに身体を動かしている
終わりも始まりもない
ただ包み込む
全身に行き渡る

愛は休まない
当然のように働く
毎朝地平線から顔を出し

一日の終わりに平然と沈んでいく
そのありがたみは
届かなくなったときにだけ
世界を覆いつくす孤独とともに
骨身に沁みて感じられる

愛は赤い
愛は血
沁みる注ぐ溺れる
愛は生育
生み出す与える育む

恋と愛
君と私
届かない
同じなはずの
二つのなにか

ねむっているとき
ふとんとかさなりあっている
わたしはふとんになっている
あたたかくてきもちいい
わたしとふとんはあたためあう
もうここからはでたくない

わたしのまるまったからだ
ひとつぶんのあなが
かけぶとんとしきぶとんのあいだに
ぽっかりとあいている
いまはわたしがうずまっているが
いつかはここをでていくのだ

あたまですっぽり
かけぶとんをかぶって
ひざをかかえる
わたしはむかし
おかあさんのおなかのなかでも
おなじしせいをしていた

あたたかいみずがみちていて
わたしとおかあさんはつながっていた
あたためあっていた
おなかとせなかのあいだに
すっぽりとわたしはおさまっていた
おなかのなかのちいさなせかい

おなかのなかのわたし
そとがわのわたし
わたしはおかあさんのいちぶだった
きもちのいいあなのなか
ちいさなわたし
つぎのわたし

いつかはそこをでていくのだ
いつかはここをでていくのだ
いつでもどこから
でていかなくってはならないのだ
さようなら

おなかも

おふとんも
おかあさんも
このからだも
さようなら

ときがきたら
さようなら

きもちいい
あな
さようなら

供述によるとお前は.....

供述によるとお前は
うつくしい女と出会った
彼女は駅の階段でうずくまっていた
いくら声をかけても反応がなく
そっと肩を叩いたとき
顔をあげた女と目があった
お前はこれがほんとうの恋なのかと思い知った
女とであった喜びすなわち嬉しさが
幸福として心の底から満ち溢れ
同時にそれはお前の平穩を凄まじい勢いで脅かした

供述によるとお前は
彼女を連れて近くの寂れた喫茶店に入り
一言も話すことなくコーヒーを飲んだ
そして彼女が目を離している際に
コーヒーにウィスキーを数滴入れた
お前は外套のポケットにウィスキーの瓶を忍ばせるような落伍者だ
彼女はそのコーヒーを何も言わずに飲んだ
気づいていたかは今となってはわからない

供述によるとお前は
その後ビジネスホテルをとった
ラブホテルではなくビジネスホテルだ
ガソリンのきれた車を寝ぐらにしていたお前は
女がどこかへ逃げてしまっても
ビジネスホテルで泊まれるからとでも思ったわけだ
そこで女とともにシングルベッドに腰をおろした
一言も口を聞かぬ女は人形のようなようだった
狂ったお前でも幻想かと不安になるくらいだ

供述によるとお前は
ここで一度部屋を出ている
こわくなったと言っているがコンドームでも買いに行ったのだろう
一時間ほど辺りを彷徨ったあと部屋に戻った
そこでお前は女の異変に気付く
服を着ていないのだ
クローゼットにもゴミ箱にも女の服はない
不思議なことにお前は女の着ていた服を覚えていない

供述によればお前は
それから女の身体を注意深く観察した
白い肌は陶器のようになめらかだった

短くやわらかな産毛が粉のようで
お前は我慢できずに背中を撫でていた
一度触れたらもう手を離すことはできず
痩せた背中にぼこぼこ浮き出た骨の起伏と
白い皮の奥に色を隠した血潮の温もりを感じていた
女は何も言わなかった
最初から最後までまったく何も
だからお前は彼女の声を知らない
人魚姫のような話だ

供述によるとお前は
最初は女が嘔吐したのだと思った
つまりぼしょりと液状のものがこぼれる音を聞いた
それは女の心臓だった
胸骨がモンシロチョウのように開いているのをお前は見た
検死官によればそれはまた綺麗に閉じられていたそうだ
女の口元からひと筋の血が垂れて
お前はなぜかそこで女に口づけをした
お前の唇にもまだ女の血が付着したままだ

供述によるとお前は
心臓を何度も胸に戻そうとした
泣きながら何度も何度も
手を血に染めて
声にならない声を挙げて
よだれ鼻水を止めもせず
でも心臓を潰さないように
力加減をしながら
胸骨を開いたのがお前なら
戻すのも容易なはずなのに
お前は皮膚の上から
心臓を押し当てるだけだった

供述によるとお前は
そこで気を失い
ホテルの従業員が部屋の扉を開けるまで
何も覚えていないという
部屋に残された齧られた心臓と
お前の口の周りについた大量の血液を見るに
それを一口食べたと考えるのが自然だ
お前が肩にもたれていた死んだ女の胸骨の中には
「うつくしいうちにわたしをたべてしまっ」というメモが残されていた
それはコンピュータで打ち出されたもので筆跡鑑定はできない
その女が誰なのかお前は説明できないし
今のところ誰もわからないままだ

葉女

切れ切れの落ち葉は切ない
道の脇に沈みこんで
自分がどこから来てどこに行くのか
道行く人にかさかさと問いかける
けれど誰もその葉が何の葉であるかを知らない

女は三輪車に乗る子どもを道で遊ばせていた
女は茶髪でモスグリーンのコートを着ていてカーキ色のズボンを履いていた
その女に話しかけたのは短髪の少女
小学校の制服に緑色のランドセルを背負っていた

背の高い女は少女のために身をかがめることもせず
知らないわと呟くときだけ少女の方を見た
ランドセルの反射のためか、少女の黒髪が深緑の光沢を見せていた
女は何やら呟いて、子どもと一緒に少女から離れようとした
少女がとっさに女のコートを引っ張ると、
トランプタワーのように女のコートはバラバラと崩れ落ちた

青々とした葉が女を取り囲むように輪になって散っていた
あらわになった女の白いセーターにはブナのように緑の斑が残っている
女は溜め息をついた後で少女を叱りつけ、
三輪車の子どもと二人で家に帰るように促した

女は橙がかった茶髪を風に遊ばせながら、小川の土手を散歩している
先ほどの出来事を見てしまった二人のスーツの男を引き連れるように
何も話さず、視線と手招きだけで、女は彼らを誘導していく
山が近づいてきて川はどんどん細くなり、
土手の草むらには無表情の樹木が乱立し始めた

「私には家族があります」女は話を始めた

あの女の子も私の子どもも、人間ではありません
旦那はその事を知りません、何一つ知りません
私の嫌がることはしない、いい夫です
絶対にしてはいけないことに関する約束を
守れない人たちが多くいる中で、私は出会いに恵まれました
彼との幸運な生活が私に油断を生んだのだと思います

秋から冬にかけて私たちは気を張らなければなりません
他の樹木の枝葉が散っていく中で、私たちは

葉の化身としてその身を彩る緑を絶やしてはならないのです
今日、私は子どもとの安らかな時間の中で衣への注意を失っていました
その綻びに気付いたときには、あの女の子によってコートが壊されていました
あの子はまだ自分の血筋に、自分の能力に気付いていないのです
私が悪かったのです、そこをたまたまあなた達に見られてしまいました

私たちは雪女のように人を凍死させたり
山女のように血を吸って人を殺したりはしません
ただ血液が透明で、陽光を人より多く求めるだけなのです
綺麗な水と日当たりの良い場所さえあれば私たちは誰も襲いはしません
その辺の植物と変わりません、あなた方のような人間と同じです

「だから、くれぐれも私たち葉女の事は秘密にしておいてください」
と、女は語気を強めて言った
二人のサラリーマンは女の澄んだ目に見入るように深く頷いた

2年後、同じ道の同じ場所で
三輪車とランドセルとコートは
それぞれ美しい緑色を輝かせて風に遊んでいた
ふと少女は何かを思い出したように立ち止まって
「人間はどうして約束を破るの」と呟いた
その声に呼応するように、枯葉の中をネクタイが2本、
風に引きずられるように、彼女たちの方に擦り寄ってくる
「知らないわ」と女は呟いた

切れ切れの落ち葉は切なく道の脇に沈みこんで
自分がどこから来てどこに行くのか
道行く人にかさかさといきかかっている
けれど誰もその葉が何の葉であるかを知らない
そういう約束になっている

段差のない家

中学時代の恩師が猛烈に車にひかれたと聞いて、慌てて病院へ駆けつけた。3階のナースステーションを抜けて、突き当たりにある個室に先生の名があった。ノックして扉を開けると、そこには一台の車があった。長方形の狭い個室に詰め込むように、ピッタリと乗用車が納まっていた。

扉を開けたまま凍りついている私のもとに、大きな缶を持った奥さんが現れて、「あら、わざわざお見舞いに来てくださったの、主人も喜びます。今ね、ガソリンを譲ってもらおうと思って、近くのカソリンスタンドまで行ってきたんだけど、灯油みたいにポリタンクに詰めてって訳にはいかないみたい。いろいろと手間やお金がかかるものね、早く退院してもらわないと」と言いながら、ガソリンを携行缶から先生に注ぎ込んだ後、鍵を差し込み、エンジンをかけてあげていた。「やあ、悪いね、心配させてしまって。3日後には退院できるらしいから、是非また家にも遊びに来なさい。君くらいだよ、わざわざ病院まで来てくれたのは」先生はフロントガラスにウォッシャー液を出して、ワイパーでゴシゴシしながら、そう言った。

「そうね、ぜひ来て頂戴、主人のために改築したんだから。あなたにも見てもらいたいもの。これ住所だから」

奥さんはワックスを塗る手を休めて、住所を書いたメモを手渡してくれた。

先生の家には前に一度だけ行ったことがあった。その時はごく普通の庭付き一戸建てという感じだったけれど、自動車に住めるように改築したということで、どのような家になっているのか、期待に胸を膨らませながら、1週間後に先生の家を訪ねた。

外観は全く変わっておらず、また車庫にも先生の姿はなく、ということは屋内にいるのだと、インタホーンを鳴らす。「どうぞ」という奥さんの声が聞こえて、よく手入れされた松の植えられた庭を抜け、ガラガラと扉を開ける、と目の前にスロープがあった。

いや、スロープというレベルではない。緩やかな傾斜の坂道がずっと真っ直ぐ、先が見えないくらい遠くまで続いていた。またしても扉を開けてフリーズしている私の元に、勝手口から奥さんが回ってきてくれた。

「そっちは主人専用のアウトバーンよ。人間用の入り口は裏の勝手口なの、驚かしちゃってごめんなさいね。もうすぐ主人も帰ると思うから、お茶でも飲んで待ってまじょうか。もう、あの人がったら、毎日子どもみたいに速度無制限区間で遊んじやって、馬鹿みたいよねえ」と、奥さんは恋する少女の横顔で微笑んでいる。

台所でお茶しながら、奥さんは「この家も今は、道と台所だけだから、スッキリしちゃって。階段もドアもない、外壁はあっても内壁はない、ずううううっと道なの。主人もずっと惹かれてたサニーになることができ、幸せそうだし、良いセカンドライフよね」と、言ってテーブルの写真立てを見る。

どこかの山の頂で先生と奥さんが肩を組んで、にこやかに写っている写真だった。「これが、主人の最後の笑顔よ」と呟いた奥さんの憂鬱を吹き飛ばすような、軽やかなクラクションに呼ばれ、私たちは玄関へと向かう。

「あなたも、うちの主人を尻に敷いてみる？私道だから免許がなくても平気よ」と、明るく笑う奥さんと先生に乗り込む。

エンジンを好きなだけ吹かして私たちは、段差のない家を最高速度で駆けていく。

ケンタッキーフライドチキンを食べた夜は

毎月28日はとりの日である

28(ニワ)トリというやや強引な語呂あわせで

オリジナルチキン4ピースとクリスピーが3個で950円

俺はそれをお持ち帰りする

「買出し頼まれちゃったよー全く困っちゃうよね」というオーラを出しながら

さもこれから複数人でそれを食するような雰囲気の家へ持ち帰り

一人で全てをたいらげる

鶏と俺との真剣勝負である

胃もたれなんてくそくらえ

ビールのロング缶を一つ箱の脇に待機させたら

finger lickin'goodと書かれた長方形のボックスをオープンする

紙袋に入れられた骨無しクリスピーをさくさくと

雪の日の道を踏み鳴らすようにして肉街道へ足を踏み入れていく

何てことはない実にさっぱりした肉だ

今の俺に言わせれば前菜みたいなもの

骨抜きにされた肉の三人官女をぺろりと食ってしまえば

いよいよ肉の殿上人の待つ清涼殿の御簾を開けねばなるまい

薄く白い紙は心なしか照り輝いている

その中に納まっている四つの肉塊

まずは骨が少ないキールを食う

油気の少ない胸肉にして店員に選ばれし鶏肉四人衆の先鋒

わしわし食うのにちょうど良い

ニク！ニク！ニク！

残った軟骨もぼりぼりと噛む

わずかに骨がのこるのみ

続いてあばらのリブを食う

マッチ棒のように細いアバラについた肉を舌でレロレロ穿り出して

指をギラギラと油で光らせながら衣という衣をすべて剥ぎ取り

時折それを炊き立てのご飯に乗せて食す

骨の間には血の塊のような内臓が隠されておりそれが密かなアクセントとなる

給水する走者のように時折ビールに手を伸ばし

ビールで口の中にたまる油と塩分を洗い流していく

香りたつスパイスと肉は胃袋の中でアルコールと混ざり合い

鳥喰い人たる我が血潮をさらにたぎらせることとなる

残すところあと2ピース

しかもウィングとドラム

つまり手羽と脚で肉はあまりついていない

双方とも肉としてはなかなかのものだが食欲の権化たる今の私にとっては

かような肉をたいらげることなど赤子の手を捻るようなものだ

ライオンが兎を捕らえるのにも全力を出すように

俺も二つの肉に無心で

本能のままに齧りついていた

あふれ出る肉汁

気付けば目の前の肉は全てこの身体の中に取り込まれていた
あれほどまでに高貴な（そして香気）な衣にその身を包んでいた
位高き肉塊たちはことごとく食い滅ぼされ
あっというまに骨の山と化してしまったのだ
わずかに骨に残った衣も一つ残らず引っ剥がしご飯にかけて食い尽くす
ちゃぷちゃぷと缶の底に残ったビールも飲み干して
鶏と俺の静かな戦いは落ち着きをみせ始める
その代償は意外に大きい
過剰に摂取した脂肪分がしばらく胃をもたれさせ
夜が更けるほどに取りすぎた塩分が喉を渴かしていく
とりの日の宿敵が残した傷を腹の内に抱えながら
なおも俺の戦いは終わらない
水を入れた鍋の中にあの鶏たちの骨を放り込む
ダシをとって冷蔵庫で待機している中華麺のスープとするのだ
戦いの疲れを癒しながらほどよく出汁の出るのを待ち
ザルで漉したら首を長くして待っていた麺を入れ
出汁諸共に喰らってしまう
その香りの芳しさ
味の美しさたるや壮絶な戦いの締めくくりふさわしい
そうめのラーメンである
不健康の極みと引き換えに食欲の解放される夜
死にゆく鶏の残すスープは囃らずもやさしい味がする
あのあばら骨の細さを見るに
鶏たちはまだ子どもだったかもしれない
それならば欲に任せて大人気ないことをしてしまった
若くして散った鶏の命を思いながらごちそうさまと手を合わせる
こうして俺のとりの日の夜の戦いはようやく幕を閉じるのである

書こうとしたことを忘れてしまって

拝啓

今はいつ頃だったか、暦を見なくなって久しく、曜日感覚も失くしてしまいました。俗世から切り離された場所に身を置いていると、今が何の時期なのかよくわからなくなってしまいます。身の回りの変化には敏感に反応しているのですが、いつのまにかあなたは遠い存在になってしまいました。その原因は、私がおろかにもあなたを含む社会というものから遁走してしまったからなのです。一度は社会との関係を隔絶してしまった私が、あなたに対して手紙を書き、あなたの元へこの手紙を届けるために社会と接触するとき、改めてその距離を埋めることの難しさを痛感しました。手紙を届けるということ自体が社会に属してしなければ難しいことなのです。この手紙は、心やさしき霊長類、鳥のくちばし、風、生き物の知恵と習性、そしていくつもの幸運が重なってはじめて、あなたの元に届くのです。いや結局のところ届いていないかもしれません。届いていてもあなたは返事が書けないので、もしかすると今回のような手紙を何度も受け取って、その中身の間違い探しのような代わり映えのなさにうんざりしているかもしれません。私はいつもそのような要らぬ想像ばかりしながらも、届く可能性を捨てきれず、あなたに手紙を書くことをやめられずにいるのです。そして、その度に私は今回こそは何か重大なことを書こうと決意を新たにします。この手紙は私の人生をかけたものであると同時に、あなたの心を核心からゆさぶるものであって欲しいのです。そしてあなたに、より豊かな未来が訪れるよう、あなたの人格の土壌を耕す栄養となるものであればと願っています。長々と前置きをしてしまいましたが、実は私は筆をとるたびに書くべきことを忘れてしまっています。あなたとの思い出を書こうにも、何も思い出されることはなく。あなたが好きなものも嫌いなものも、あなたの笑顔も、いや実は顔さえもすっかり忘れてしまっていて。髪形も匂いも仕草も名前さえも、あなたについての記憶を引き出す要素の一切を喪失してしまいました。実はあなただけでなく、私について定かな記憶すら損なわれ始め、私の姿かたちはおろか、私が何を好きで、何を嫌いで、どういう名前で、どうしてこのような遠いところまできてしまったのか、確固たる理由や決意があったかどうかさえはっきりしません。土を失った種のように根を張る術を失ったものは、自分が一体何者でどういう役割や目的を持って生まれてきたのか、その重要な中心部分を欠落させてしまうのです。私がおかしらしささえ取りこぼしてしまってもなお、手元に残っていたのが言葉でした。私は言葉が失われるのが怖いのです。言葉を失ったら、人間であることから逃れてしまうような気がするのです。恐らくは何もかも手放してしまいたくて、全く何も無い状態に憧れてこの状況に身を投じたはずなのに、そのときの快感はこの身から取り除かれた重量感を体が覚えている間だけで、日にちが経てばそのような感覚の存在が雲のように流れて消えてしまったのでしょうか。わたしが手紙と信じているこの言葉たちは、本来の手紙というものからは逸脱したものとなっているかもしれないし、これを読んだ全うな社会の人間はそこから何も受け取れないかもしれません。これはただの廃人の残滓。世を逃れ、あてもなく遁走し続け、俗世から脱け出し、縁のしがらみから解けてしまった憐れな人間の垂らす針の無い釣り糸なのです。あなたへ向かう以外の術をなくした私の中の壊れかけの言葉たちの、最後のあがき。ああ、末筆ながらわたしを唯一わたしらしめている茫漠たるあなた。時節柄、どうぞご自愛くださいませ。

敬具

こわれた護岸をなおしています

「こわれた護岸をなおしています」

私にはたしかにそう聞こえる。その男は画家だったので、「こわれたゴーガンをなおしています」だったのかもしれない。アトリエには花瓶にいけられたカサブランカがあった。「ひまわりではないのですね」と私がからかうと、「あれは夏の花ですから」とだけ答えた。その言葉を機に、伏せられていた彼の目はさらに私から遠ざけられた。互いに位置を動かないままではあったが、私と彼との距離はより遠くなった。

彼は耳に包帯を巻いていた。リンゴの皮を頭に巻いたように赤く染まった包帯だった。気が狂っていたのかもしれないし、誰かに襲われたのかもしれない。彼はとにかくひどく疲れているようだった。目の周りがかくぼむように弛んでおり、その窪みによる影と皮膚の黒ずみによって、ひどく暗い色をしていた。目の周りだけが死んでいるようで、顔の中で目が一番遠い部位に思えるほどだった。

彼は狂気を内に秘めながらも、疲弊のためにそれが出せないでいるのかもしれない。銀色のチューブから絵の具をひねり出す彼の手が、創造性を使い尽くした心から、なおもその残滓をかき集める彼の描画を思わせた。

「輪郭が絵を築き上げる。それは認めよう。だが外側の皮膚だけが、私を表すのではないように、線は絵の外側でしかない。そうだろ。いや、そうなんだ。それは間違いないんだ」と彼は言った。一度もこちらに視線を移すことなく、作業に没頭しながら独り言のようにそう言ったのだ。

彼は目の前にあるものを絵に写していった。私と彼は目の構造が違うのか、あるいはひどく捻くれたフィルターを通していいのかは分からない。彼の描く絵は、線という線がうねり尽くしていた。その一本一本の線の長さゆえに、辛うじてその輪郭を描き出している絵が、そのキャンバスには立ち現れていた。そのうねりには、想像を絶する重圧によって歪んだ心と、線としての長さを保てぬ一筆ごとの苦悩が、表現されているように思えた。彼の心で渦を巻く行き場のない生命力が、絵という鏡に映されているのだ。

「こわれた護岸をなおしています」

私にはたしかにそう聞こえる。彼の絵を描くときの口癖なのだ。彼にとって絵を描くことが「こわれた」を「なおす」ことであることは間違いなさそうだが、彼の言う「護岸」がいったい何なのかということは結局伝わってこないままだ。

しばらく彼の言葉を反芻しているうちに、彼のいう護岸は「輪郭」なのではないかという解釈が頭に浮かんだ。彼は輪郭だけが絵ではないと言った。それは彼の絵画論ではなく、絵の描線に関する、彼なりの悩みの告白だったのかもしれない。

こわれている彼の絵の輪郭。私を表すための、そして私を納めておくための、器が壊れているのだ。だから彼の線は歪みながらも、輪郭を追い求める。「こわれた護岸をなおしています」という言葉通り、一つひとつ石を積むようにして護岸工事をしているのだろう。

こわれることによって失われた護岸と、その修復。つまり彼は「喪失と再生」を、絵を通じて何度も何度も経験しているのだ。この言葉が繰り返されるたび、彼は護岸がこわれている現実と向き合い、今度こそ「こわれていない護岸」になるように「なおす」作業を続けているのだ。

最後にひとつ申し添えておくと、護岸をこわしているのもまた彼自身だ。彼は花瓶のカサブランカのつぼみが花開くたびに、几帳面にそのおしべの葯を取り除いていた。白い花卉に花粉を撒き散らす雄蕊の葯が、彼の美学に反するらしかった。彼は水が流れ込む機会を、護岸によって奪

っている。水が陸地へ流れ込もうと、護岸をこわすたびに、彼はこわれた護岸をなおした。それは水と陸との交わりを、その均衡を保つために阻止することに他ならなかった。護岸も、水も、陸も、彼そのものであり、彼は絵を描くことによって「こわれた護岸をなおし」、心の均衡を保つ。それは同時に彼自身の生命力を、芸術を通して去勢することになっていたのかもしれない。

「こわれた護岸をなおしています」

その底知れぬ苦悩は、絵を観る者にも、言葉を聞く者にも、恐らく伝わることは無いだろう。

背中には向日葵(リライト)

光に弱い体質だった、身体がというよりも、精神的な部分で
拒絶反応が出て、カーテンを閉め切った部屋に閉じこもる日々が続いた
わかったつもりの大人がやってきて、何もかもを大衆と社会のせいにして
去っていった、この世から太陽がなくなれば僕だって外に出てやるさ
町をさ迷い歩くこともあったのだけれど、それは真夜中に秘かに行われた
大人は誰一人そのことに気付いていない
ベッドの下に蛍光緑のラインが入ったスニーカーを隠し
月明かりに反射する靴の明るさだけで、夜の闇を
進んでいくことができた、月は太陽の光を反射して明るい
靴はその月明かりを反射して明るい、間接の間接で
光を浴びてはいるけれど、それぐらいの濃度なら何ら問題ない
薄い毒なら少しくらい飲んでもすぐには死なないのと同じ
むしろ闇の中の仄かな光はアルコールのように心を痺れさせた

大人になると心を覆う膜が厚くなったのか
昼間でも山間部には出かけられるようになった
季節に関わらず麦藁帽子を目深に被り、長そで長ズボンに手袋は欠かさなかった
誰が言い始めたのか、僕はカカシと呼ばれるようになった
案山子ではなく欠かしと書くカカシだ、確かに何かが欠けている僕は
僕を批評する冷たい目に腹が立つとともに、少し心地よさも覚えていた
それは塩の濃度が高い死の湖で泳ぐような快感だった、精神の粘膜が痛いくらい痺れた

強く雨が降る日に、傘も差さずに家を出た、麦藁帽子も手袋も部屋に残して
台風に蹂躪される街は僕のもの、僕だけのもの、
横殴りの雨、薄暗い街、ぶつかりあう看板と壁、引きちぎられそうな木々
目が開けられないくらい大粒の雨の殴打、もっと僕を叱ってくれ、僕の町よ
キャスター付の看板がこちらに吹き流されてきたので、思い切り蹴り倒した
丁寧に並べられた植木鉢の列を支える土台を蹴り倒し、花を踏み潰した
僕は台風、僕は町、蹂躪するのは僕、蹂躪されるのも僕、大人は何も見えていない
電線がイカれた縄跳びみたいにびゅんびゅん鳴って、雨は空中で波打っていた
興味本位で見に行った川の、暴走する濁流に足元をさらわれて、僕は流れ去ってしまった

目が覚めたら、生きていた。
僕は死にたくないと思っていた、泥水を飲みながら、何度も、目が覚めるまでずっと、
それは僕の意思じゃなかったし、僕の手の届かない所にある僕のすべてでもあった
病室は身体を癒すための場所ではなく、心の暴発を監視する場所だった
僕は欠かしという呼び名が嫌だった、どうしたものかと考えあぐねて、
向影葵と書いてひまわらずと名乗ることにした

お見舞いにもってきってもらった花を解体するのを日課にしていた僕のことを
ひまわらずと呼んでくれる人は誰もいなかった、花は僕に許しを請うことはしなかったし
断末魔の叫びをあげることもなかった、もちろん僕の名など呼ぶはずがない

姉は花を毎日持ってきた、そして解体された花を丁寧に集めて、日記にセロテープで貼り付けていた、こうすれば花はしばらく色を失わないのと言った母はもう母ではなくただのヨウコになっていたの、手紙と金が母を象るすべてになった姉が僕にとっての母で、手紙も金もただの紙と金属だった

ある日、姉がいつもの雑多な花束ではなく、大きな一輪の花だけを持ってきた向日葵か、僕の真逆だ、と思った、実際にそう姉に言ったのかもしれない姉は僕に言った、この花はあなたの真逆じゃないわ、あなたと隣りあわせなのよつまりね、あなたの背中には向日葵があるのよ、向日葵を背負っているからあなたは光に背を向けるの光に背を向け続けることはあなたの向日葵を育てることなのよ、何も悪いことじゃない姉はそう言うと、僕が解体した白い花びらをノートに貼り付け始めた

僕はその向日葵を壊すことができなかった壊すどころか一輪挿しの水を毎日入れ換えて、大切に世話した向日葵と目を合わせることはしなかったけれどその花が自分の分身であり、自分の影であるように思えた

姉は向日葵を持ってきた日、病室を出るときに、こちらを振り返って呟いた向日葵は太陽の方をしっかりと見つめるイメージがあるけどね、実際のところ向日性はそれほどじゃなくて、いつも太陽を見ているわけじゃないのよそう言い終わると部屋を出ていった、

僕の背中の向日葵もそれぐらい適当に咲けばいいのにと考えた

ブリキの森と紙の古城とウルサイ湖畔の魔法

月夜の晩に森に迷い込んだ。ブリキでできた木の幹と葉っぱの上を、糸状に光が跳ねていくので、歩くだけで遊んでいる気分になった。

月のかけらを吊るした糸を、ぶら下げながら歩く男の子と出会った。騒がしく音がする方へ進めば湖があり、音に背を向けて歩けば紙の古城に着くと言う。

城が紙でできているというので、雨が降っても大丈夫なのかと心配したが、彼は雨について知らないようで、水が降ることだと教えたら、降るのは光だけだと笑った。

太陽が上から落ちてきて、月を跳ね飛ばして夜が終わった。城へと歩いていく途中、大きなブリキの塔があり、傍には深い井戸があった。塔はブリキの木の幹と土でできており、井戸は木の葉と土で固められていた。

城は図書館にあるような古い本を何冊も積み上げたような姿をしていた。太陽より大きな丸い紙を丸めた円錐型の屋根と、どんなハサミも通さないような本の表紙でできた城壁、こっそりの中に入れば壁紙や床の紙はいい感じに古びていて、古書店に足を踏み入れた時のにおいがした。

門番どころか人っ子一人いないので、誰もいないものと思ってぐんぐん奥へ進んでいたら、玉座にぽつんとカエルが座っていた。緑色の宝石のように透けた肌で、どのブリキの葉よりも丸くあでやかな姿だった。頭には金色のススキを巻いているが、服は着ていない。

カエルの王様は視線ひとつ動かさず口も開くことなく、「この世界にかかった魔法を解くことができるか？」と私に聞いた。カエルの王様としては今の状態も気に入っているらしいのだが、魔法が解けない限り私はこの世界から出ることができないらしい。

私とてこの世界から脱出する必要をあまり感じなかったが、湖畔の魔法というものに興味が湧いたので踵を返して、元来た道を湖の方へ一目散に駆け出した。

湖は期待していたよりもはるかに小さく、プラスチックのコップを百個くらい敷き詰めただけのものだった。その傍でリスがペットボトルのコカコーラを、次から次へと並べられたコップへ注いでいた。休むことなく仕事を続けているのだがリスが一周を回り終わるころには、最初のコップのコーラは炭酸が弾けきって空になってしまっているのだ。リスは湖の外周のコップにコーラを注ぐだけでいっぱいいっぱい、几帳面に敷き詰められたコップの中のほうの物たちはのどが乾ききっていて、口々に不平不満をいうのでうるさくてたまらなかった。

その不平不満の大半が懸命に働いているリスに一斉に向けられていたので、いたたまれなくなって手伝いを申し出た。たくさんのコップが私を冷やかしたが、私がリスからサイダーを預かって乱暴にコップに注ぎ始めたら、コップは一瞬水を打ったように静かになったが、すぐにもとの喧騒を取り戻した。注いでも注いでもペットボトルのサイダーはなくなり、3分と立たない間にサイダーは蒸発した。

「これじゃあイタチごっこだよ」と私がつぶやいたら、リスは必死に自分はイタチではなくリスだと弁解し始めたので、「そうだね、リスだね」と相槌を打って作業に戻った。注ぐのにも疲れて手を止めようとすれば、途端に囂々と非難を浴びることになる。いつまでも満たされることなどない。もういやだと思ったときに、最初に出会った男の子が通りかかり、「頭を使えばいいんだよ」と教えてくれた。頭を使うと言ったって一体どうすればと聞き返す前に、彼は月のかけらを集める仕事に戻ってしまった。

しばらくしてリスが、「ずっと注ぎ続けることができれば、乾く前にすべてを満たせるのにね」と漏らしたので、私ははっとして「それだよ」とリスに笑いかけた。私はリスに耳打ちをして、コップを積み上げる作業に入った。

リスと私の二手に分かれて、底を縦横5個ずつ25個分敷き詰めて、その上を16個、9個、4個と5段のピラミッドになるように積み上げる。積む間にずっとコップの口から不平不満がこぼれたが、あまりうるさいものは口を手でふさいで作業を続けた。

私は要領がわかっていたのですぐにできたが、私の方が完成したときリスはまだ2段目の途中だった。打たれ弱いリスはコップの文句にすっかり疲弊し、ちょっとコーラを注いではまた積むなどロスが多い上に、背が低く手足が短いため作業が難しいようだった。仕方なく私も手伝って、ようやく2つのコップのシャンパンタワーを完成させた。積み上げることでコップの文句が合わさって、愚痴の大合唱となっていたが、私とリスが頂のコップにコーラとサイダーを注ぎ始めると少しずつ声は勢いを失い始めた。

一番上のコップはすぐに満たされ、あふれ出た液体がコップを伝いその下のコップへと注がれる。下の段へ行くほどに時間はかかったが、次第に文句は小さくなっていき、最下層に炭酸水が届くころには泡の弾ける爽やかな音だけが辺りに響いた。

「うまく行ったようだね」と丸くなった月を持った男の子が現れて、空に放り投げると太陽は上のほうへ弾き飛ばされて、世界はすっかり夜になった。「おかげさまで」と私は答えた。すぐに蒸発してしまうので手を休めることはできなかったが、泡の弾ける音には波の音のようにいつまで聞いても退屈しない心地よさがあった。

ずっと注いでいるうちに、空にうっすらと雲が立ち込め始めた。やがて雲は空を覆いつくすほど広がって、ごろごろと稲光を出し始めた。押さえつけられたコップの不満が、空にたまっていくようだった。それでも注ぐのをやめないで、リスにも「ここで止めたら元の木阿弥だよ」と諭した。

やがてぽたりと、ぽたりと雨が降り始めた。甘いあまい雨だった。男の子ははじめてのことに慌てふためき逃げ出してしまったが、リスは注ぐ手をやめなかった。そうこうするうちに目も開けていられないくらいの大雨になり、世界を飲み込むほどの大洪水となった。

私とリスは炭酸の濁流に飲まれて、城のほうへと押し流されていった。紙の城はすっかり崩れ去ってしまって、何冊かの本だけがぷかぷかと浮かんでいた。その本に飛び乗って、筏のようにすることでリスは助かった。その背中を見届けて、私は炭酸の中に沈んでいった。深くふかく沈んで、炭酸の泡に輪郭をすべて溶かされて、完全にふやけきったところで目が覚めた。

魔法が解けたのか、夢から覚めただけなのか、確かめるすべはないが、今でも目を閉じて耳を澄ませば、ブリキの森で聞いた炭酸の泡の音を思い出せるような気がするのだ。

冬に花火をしないのは空が寂しくなるからだ、と思う
寒い中に一瞬だけ弾ける火の花が
マッチ売りの少女が起こす小さな火のように儚く消えて
すぐに冷たい風に流れ去っていく
乾いた夜空の、花火を冷笑する冷やかな視線
と、静寂

いくら重ね着をしても風が手足の熱を奪う
身体の芯が震える
油断していると泣きそうになる
気付けば足元ばかり眺めていて
眉は額にギュッと集まる
そんな険しい顔の人ばかり歩く街のなかを
女が裸で歩いている
背筋を気持ちが良いほどに真っ直ぐ伸ばして
しなやかな手をしっかりと振りながら
軽快に歩いている、顔はうっすら笑っているではないか
背は高く、肌は標識の柱のように白くてツヤがある
寒さに身を縮こまらせることなく、身体を震わせることもない

彼女はそのまま歩道橋を上っていった
階段を降りるときに揺れる乳房を
犬を散歩中の通りすがりの老人はおもしろいくらい凝視している
裸の女王様だの、と犬に話しかけると老人は道路の向こう側へ消えてしまった

女は歩道橋脇のセブンイレブンに入った
そしてレジに立ち尽くす店員に尻を向け、陳列台を物色し始めた
レジ正面の三つの棚を軽く探した後、店員に花火は置いていないのか、と尋ねた
アレは夏しか置いていないんです、と店員は答えた
店員は視線を下に逸らすフリをして彼女の陰部をちらりちらりと見ていた
ホームセンターに行けば売っているかもしれません、と店員は言った
しかし彼女は閉店時間を過ぎたホームセンターには行かず、
コンビニの近くにある民家の前で立ち止まり、インターホンを鳴らした

はい、というスピーカー越しの主婦の声に
ちょっとお借りしたいものがあるのですが、と彼女は丁寧な口調で話した
インターホンにはカメラが付いていなかったのもので、
何も知らずに家から出てきた主婦は
裸の女を見るなり悲鳴をあげて、すぐに家の中に戻ってしまった
家の中から慌しい足音が引切り無しに聞こえて、
主婦はいくつかの服をその手に持って玄関から再び顔を出した
サイズが合うかはわからないけれど、と言いながら服を差し出し、

警察には連絡した方がいいのかしら、と媚びるように小声で尋ねた
女は両手でしっかりと服を受け取ると深々とお辞儀をして、その家を後にした
彼女が歩くたびに揺れる彼女のお尻の肉を
主婦は玄関先でただひたすらに眺めていた

女は服を持って歩道橋をもう一度渡った
そして交差点で信号待ちをしている車に近づいていった
女が窓をノックするだけで、彼女はヒッチハイクを成功させた
運転手が性衝動に頭を侵されていたからだ
運転手の男は自分の息が荒くなり、鼓動が強く早くなっているのがわかった
スピードを出して、と女が言った
男はその声に導かれるように
裸の身体をシートベルトが締め付けている姿を見て、思わずアクセルを踏み込んだ

男の家はすぐそこだったのだが
訳もわからず全速力で直進を続けていき、すぐに高速道路の入り口についた
高速で行きましょう、と女が言った
男には女が拘束してイかせてちょうだいと言っているように思えた
男はその厚い唇が動くさまに視線を奪われて、前を全く見ていなかった
しかし不思議と事故を起こすことはなく、高速道路をひたすらに進み続けた

少し落ち着きを取り戻した男は
女が膝の上に綺麗に置かれた服を乗せていることに気付いた
その服を着ないのかい？と男は尋ねた
男は女に服を着て欲しかったのではなく、
女の膝を隠している衣服が不要であるならば後部座席に押しやりたくてそう言った
女は男の声など聞こえないと言う風に道路が切り取る短い地平線を見つめている
着ないのなら後ろに置いておくといい、と言いながら
左手で膝の上から服を取り除き、後部座席へ放った
それは紺色のワンピースとベージュのカーディガンであるように思えた
女の白くふくよかな太ももが露わになった
男はますます前を見なくなった

男がそれからどれだけ女に話しかけても女は何も答えなかった
やがて海に着いた、
男は長くドライブするために、道に迷うための努力をしたが、
この国は海に囲まれているので結局は海に出てしまったのだった
夜中に交差点で女を車に乗せてから、男は夜通し運転を続けていたために、かなり眠かった
我慢しきれなくなった衝動を胸に、女に強引に覆いかぶさった
シートベルトを外し、女にキスしようとしたときに
外へ出ましょう、と女が言った
男も何となく外に出なければならぬような気分になった
この状況で外に出ないでどうしろと言うのだとさえ思った
外に出ると辺りはとてもよく冷えていて
車のライトを消してからは、何も見えないくらいに真っ暗だった

波の音だけが絶え間なく響いている

花火、と女は言った

花火は持ってないがジッポ一の火ならある、と男はポケットを探った
ライターの火を頼りに二人はコンクリートの壁を越えて砂浜に入った
暗すぎて女が裸であることが見えないのなら、女が裸である意味はないなと男は思った
と同時に、誰にも自分の姿が見えないのなら、自分が服を着ている必要もないと思った
男は服を脱ぎ捨て、裸にジッポ一ひとつを持って女と歩いた

男はさりげなく女と手をつないだ

足が海水に触れた

女に抱きついて、砂浜に倒れこんだ

女の手足も自分の手足も冷えていたが抱き合えば温かかった

海水の冷たさは痛いほどであったが、女の髪が波に揺れてふわふわと漂っている様は
何ものにも変えがたい美しさがあった

女を抱きしめているあいだに、砂浜に置いておいたジッポ一が倒れて消えてしまった
それでも女の温もりと肌の柔らかさは消えなかった

目を閉じていても女のミルクティのように白い肌がまぶたの闇に浮かんだ

女からは乳の匂いがした、それは赤ん坊の枕の匂いに似たものだった

女の髪が海水に濡らされるたびピチャピチャと鳴った

女はピクリとも動かなかった

どうしてよいかわからないまま

男は女に身体を密着させ、胸に顔を埋めていた

やがて水平線が白み始めた

ハナビ、と女は言った

声が震えていた

男はハナビがないと大変なことになる気がした

しかし女の元を離れたら、もう女とは触れ合えないだろうという予感もあった

男はハナビを捜し始めた

砂浜に落ちているハナビはどれも使用済みで風雨にさらされて黒ずんでいた
ライターの火がなくても辺りを見渡せるほど明るくなってきて

男は自分の見える範囲にハナビらしきものはないということに気付いた

そして、女のところに戻ろうと思い、元居た場所へと引き返した

女はまだいた、倒されたままのマネキンのように波に平行に横たわっている
顔を覗きこむと目は開いていて、男を視界に見つけるとhanabiと呟いた

なかったんだ、ごめんな、と男は呟いた

女は三度瞬きをして目を閉じた

朝日が水平線から頭を出そうとしていた

朝が来た

空は驚くべき速度で塗り替えられ、

多くの人々にとって平凡な夜は平凡な朝へと移り変わっていく

男は朝日が生まれ昇る速度に驚きながら、太陽をおもしろいくらい凝視していた

彼の瞳は太陽の強烈な光線に攻撃され、防護まぶたが降ろされた

男がもう一度目を開けて、痛めた目が正常な視野を取り戻すまでにわずかな時間がかかった

男が足元を見やると女は氷付けのジュゴンになっていた
おい、と言って抱き起こすと胸の所から2つのリンゴが零れ落ちた
男はそのリンゴを左右の手に取り、思いきり握り締めた
ハナビのようにリンゴを弾けさせる姿を思い描きながら、
それほどの握力は持ち合わせておらず、
自分の車へと戻った
座席に腰掛け、自分の服を紛失したことなど全く気にせずに
足をハンドルに乗せ、右手のリンゴを噛んだ
口を最大まで広げて、できる限り大きなひと口で噛んだ
リンゴはみずみずしく、ひんやりとしていて
男は両目から、控えめな彗星のような涙を一粒ずつだけ流した

ピチカカ反応

ピチカカという鳥がいます。それはとてもめずらしい鳥です。満月の光に当てると羽が青く光るのです。ピチカカ鳥は新月の夜に生まれます。そして満月の光に当たると青く光り輝き、月が沈む頃に卵を産み落として死んでしまうのです。なぜ満月の光なのか詳しいメカニズムは解明されていません。太陽の光にも蛍光灯の光にも、その羽根は何ら反応を示しません。月夜の晩に外に出すとほんのり青く光るのです。満月の夜のピチカカ鳥の青い閃光を見た者は、ひと月分の幸せを約束されると言われています。現在生存が確認されているピチカカ鳥は全部で三羽。そのうち繁殖を目的とした研究用に一羽だけ、人間の手元で育てられています。育てると言っても、餌として固形物を食べることはない鳥なので、人間は何もすることがありません。ただ満月の夜に籠から取り出して月光に当てて、翌朝に卵を回収するだけです。次の日の朝には光り果てて真っ白になったピチカカ鳥の傍らに、南国の海のような透き通ったマリンドールの卵が産み落とされているのです。暇をもてあました飼育員と研究員は、ピチカカ鳥の剥製を金持ちに売り飛ばしました。普段のピチカカ鳥はただの黒い鳥でその辺にいるカラスと素人目には何の違もない鳥です。そのため、ただのカラスをピチカカ鳥だと言って売ったのです。すこし賢い研究者になると黒いカラスを白く染めてから剥製にし、もっと賢い科学者は白いカラスを剥製にして金持ちに売り飛ばしていたそうです。ところが本物のピチカカ鳥は死んでしまうと、空気の抜けたゴムの風船のように皮膚がくっついてしまい、剥製にはできません。餌を食べないため肉がなく、皮も薄く羽根はとても柔らかいので、無理な力を加えると羽根はすぐに抜け落ちてしまい、くしゃくしゃになってしまうのです。そして不思議なことに死んだピチカカ鳥には骨が見当たらないのです。しかし、この説明の方が嘘だと思われるようになってしまっているようで、ピチカカ鳥の剥製や骨格標本は今も高値で取引されています。

ところで、なぜこの鳥をピチカカ鳥と言うと思いますか。その由来のお話をしてあげましょう。

昔、家へ帰ろうと森を歩いていた樵が、木々の間の中で月の光に青く光る鳥を見つけました。彼はその鳥を持っていた上着で捕まえると、家に持って帰りました。朝起きるとその鳥はカラスのようなただの黒い鳥に戻っていました。昨夜はかなり酔っ払っていたので、もしかするとこれは何かの間違いだったのかもしれないと思いました。とりあえず、男はまた夜になるまで酒を飲んで待つことにしました。朝から酒を飲み続けた男は、昼過ぎにはすっかり眠りこんでしまいました。そして、閉じている眼の前を、強い光が横切る気配によって男は目を覚ましました。辺りはもう夜になっていました。そして、机の上を歩き回り青光りする鳥を見たのです。男はその鳥を見せ物にすることにしました。ピチカカ鳥は満月の夜以外でも、月光に当たるとぼんやりとした青い光を放つので、男はそのピチカカ鳥の光を見せ物にして一儲することができました。鳥を見せ物にした収入は、それまで飲んでいたものよりも数段よい酒を飲むことができるくらいの儲けになり、男は鳥を見せること以外の仕事はしなくなってしまいました。ところが、新月から満月までは見せ物としてお金儲けができるピチカカ鳥ですが、満月から次の新月までの間はずっと卵のままなのです。ピチカカ鳥が卵になると、客はほとんど寄り付きません。男が一生懸命その鳥について説明をしても肝心の鳥が卵の状態では客も金を払う前に逃げてしまいます。男はピチカカ鳥が卵のときはすっかり酒に溺れるようになってしまいました。そのうち、ピチカカ鳥が生きている間に稼いだ金を使い尽くして、卵が孵化するのをイライラしながら待つということが多くなってきました。そして、ついに彼は満月の晩にピチカカ鳥を洞穴に閉じ込めることにしたのです。彼は満月の光にさえ当てなければ、ピチカカ鳥はずっと生き続けるのではないかと考えました。もしずっと生きていれば儲けは単純に倍になります。いいえ、もしかすると倍以上になるかもしれないと男は思っていました。いつも青く光る鳥の評判が広まった頃に、鳥は卵になって

しまい、増えかけた客も結局は元の量に減ってしまい、歯がゆい思いをしたことは一度や二度ではなかったからです。もし鳥が生き続ければ、客はどんどん増え続ける。そうすれば、男は酒を飲み続けることができる。男は飲み仲間を呼んで四人がかりで、洞穴に大きな岩の蓋をしました。そして、その蓋の前でじっと座って夜が明けるのを待っていました。そのうち男は仲間たちと酒を飲み始め、月が昇りきる頃には完全に酔いつぶれて眠ってしまいました。ふと尿意を催した男が目を覚ますと、ピチッピチッという音がするのを聞きました。その音を辿っていくと洞穴に蓋をしている岩の下の方からピチッという音が聞こえてきます。耳を澄ませると、ピチッという音の合間にカカツという音がするのわかりました。男はピチカカ鳥が嘴で岩を突いているのだと思いました。ピチカカ鳥の嘴がどれほどの硬さなのか、男は試してみたことがなかったのでわかりませんでした。仲間を起こして蓋の上にさらに蓋をすることにしました。しかし、ピチカカピチカカと音は鳴り続け、その音はどんどん大きくなっているように感じられました。男たちは顔を青くして、どんどん石を積んでいきました。そうしているうちに、飲み仲間の一人が地平線を指差して「あ」と言いました。空が白んできたのです。「やった、やったぞ」と男は言いながら、今度は石を退け始めました。実際、ピチカカ鳥を満月の光に当ててなかったのは今回が初めてだったので、中がどうなっているか誰にもわからなかったのです。石を積み上げるのは大変でしたが、それを崩すのはとても簡単なことでした。男たちは足で蹴り、棒で押し、洞穴の前の石と岩を退けていきました。ようやく最後の一枚になったときに、男たちはピチカカという音の大きさに驚きました。何かが壊れそうになっているような音でした。最後の一枚をまた4人で退けようというときに、仲間の一人がその得体の知れない音にビビって逃げていってしまいました。男たちは彼の情けない悲鳴を笑いながら、何とか三人で岩を退けようと動き始めました。4人で動かすのも大変な岩でしたから、疲れきった三人で動かすとなるとかなり大変な作業でした。三人で息を合わせて最後の力を振り絞り、岩を押し転がすと三人とも崩れ落ちるように尻餅をつきました。それほどまでに大変な作業だったのです。そして、深い息をひとつついて、洞穴の中を覗くとちょうど男たちの後ろから太陽の光が洞穴に差し込んできました。光に照らされた穴の中で、ピチカカ鳥はぱんぱんに膨れ上がっていました。最初は大人の頭くらいの大きさだったピチカカ鳥が、相撲取りくらいの大きさに膨れていたのです。その薄い皮膚は枯れた大地のように深くひび割れ、黒かった色は痛々しい桃色になっていました。体が膨らむたびに、皮膚のひびはピチッと音を立て、その嘴は苦しそうにカカツと鳴くのです。そのピチッという音も、カカと鳴く声もう限界に近いようでした。「カカツ！！」と鳴く声はもはや断末魔の叫びです。

太陽の陽射しが完全にピチカカ鳥を照らしたときに、ピチカカ鳥ははじけ飛びました。そこから後は、逃げ出して遠くから見ていた彼らの仲間が見たという話なのですが、弾けたピチカカ鳥の破片が飛び散り、その多くは煙になって洞穴の辺りに立ち込めたそうです。尻餅をついていた彼らは、やがてバタバタと苦しみ始めました。顔や手足が青くなっただかと思うと、今度は見る見る白くなっていきました。足だけが青白く光り輝き、彼らは足をバタバタと地面に打ちつけ、七転八倒してのた打ち回りました。「ぼんやりとした青い光があいつらの身体を覆ったと思ったら、全部足のほうに集まっていったんだ。まるでアレだ。静脈を全部足に集められているみたいない感じだったよ」と仲間の男は言ったそうです。やがて、すこし落ち着いたのか、体力を使い果たしたのか、かかとは相変わらず激しく地面に打ちつけているものの、転げまわるような動きはしないようになりました。もうしばらく経ったときに、最初に鳥を見つけた樵の男のかかところがピチッと裂け、そこからマリブルーの卵が出てきたのです。残りの二人の男も、ピチッとかがかところが裂け、そこからマリブルーの卵がこぼれ出てきました。両足から卵が出てきたのですがマリブルーでない方の白い卵は、それから何度新月を迎えても孵化しませんでした。このような話から、ピチカカと割れる鳥、ピチッとかがかところが割れて生まれた鳥というようなことで、ピチカカ鳥と呼ばれるようになったのだそうです。ちなみに、通常の産卵ではピチカカ鳥は生涯に一つの卵しか産まないで増えることがないのですが、このお話が本当なら一羽から三羽の鳥に増やすことができます。しかし、ピチカカ鳥を知っている人は、大抵その由来も知っているのです。自分

の命を犠牲にしてまでこの鳥を増やそうと思う人はいないようです。ピチカカ鳥に夢中な人々は、ピチカカ反応といわれる未知の化学反応を解明することばかり考えているみたいです。

勘違いしている人が多いのだが、「嘘つき」というのは本人の性格の悪さによるものではない。先天的なものもあれば、後天的なものもあるのだが、「嘘」に憑かれた人間が「嘘つき」になる。そもそも「嘘」というものは、常人の肉眼では見ることはできないものなのだが、ごく稀に「嘘」と対峙するものもある。在る者は「目を魚のように泳がせてしまう水辺の生き物だった」というし、また在る者は「身軽にひょいひょい飛び回る鳥のような生き物だった」という。僕の伯母が言うには、「カワウソのような姿をした腹黒い獣」だという。

どの証言もなかなか信じられたものではないが、「嘘つき」の人間を見つけることは、「嘘」そのものを見るよりも実に容易い。誰の心にも大小の違いはあれども、「嘘」が住み着いているものである。しかし、「嘘」にどの程度憑かれているかは、人によって差がある。わたしの伯母は多くの人々にとって、「嘘つき」な人間だったようだ。彼女の人生はいつも「嘘」とともにあった。

祖母は伯母が生まれてくるときに、医者からこの子は男の子だと聞いていたらしい。しかし生まれてきてみれば、女の子だった。エコーで男の子を女の子と間違えることはたまにあるらしいのだが、その逆はめったにないと医者は本当に驚いていたそうだ。医者が驚くのも無理はない。医者は確かにエコーで胎児の男性器を確認したはずなのである。「あるものがないように見えることはあっても、ないものがあるように見えることはないだろう」と祖父も戸惑っていたそうだ。祖父母は伯母のために男物のベビー用品を揃えてしまっていたらしく、伯母の幼い頃の写真はどれも男の子のような姿で写っている。そして、その2年後に父が生まれたときには、伯母のお古を使ったというのだから、妙な話である。

出生時の性別間違いのせいかどうかはわからないが、伯母は「あきら」という名前だった。男の子のつもりで用意した名前をそのまま無理につけたのではないかと本人はいつも疑っていたが、男の子だったら父の「真一」が伯母の名前になっていたらしい。

伯母は僕が12歳のときに死んだ。ちょうど春休みの終わりで、僕はその二日前に携帯電話を買ってもらったところだった。その携帯電話に最初にかかってくるのが伯母の訃報だった。伯母と父のアドレスしか入っていない携帯電話が鳴って、どきどきしながら出たら父が「お父さんだ」と名乗り、僕よりも強張った声で「ねえさんがしんだ」と言ったのだ。僕は聞こえているのか聞こえていないのか、よくわからなくて何度も聞きなおした。父は大きな声ではっきりと「伯母さんが死んだ」と言い直した。言葉の意味はわかったが、その意味する所がつまりどれだけ重大なことなのかはわからないまま電話を切った。

伯母は僕の初恋の人だった。嘘を身につけて歩いているような人だった。彼女は旅行好きで、イギリス、ドイツ、インド、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、ロシア、アルゼンチンといった国へ行った話をしてくれた。彼女は旅行記をつけていて、そのページを捲りながらたくさんの国での思い出を語ってくれた。時には、そのときのお土産や写真なども見せてくれた。僕は彼女の隣に座って、彼女がにこにこ笑いながら昔の話をするのを聞いていた。彼女はとてもいい匂いがした。甘い花の匂い。手足は茎のようにすらりと長くて、肌は白いのだけれどときどき紅潮する。美人は花にたとえられるけれど、まさにその通りだと思った。この歩く花のような伯母と、言葉を話すゴリラのような父が姉弟であると、そう簡単には信じることができない。でも、彼女の幼少期の頃の写真を見せてもらうたびに、若い伯母の隣にまだ猿だった頃の父がいるので、この二人が姉弟であることは紛れもない事実であるようだった。

嘘は父の姉弟関係ではなく、伯母の話の中にあった。伯母はパスポートを持っていなかった。

日本はおろか、本州から出たこともないはずだと父は苦々しげに言った。土産物はおそらく恋人や友人にもらったものだろうというのが父の推測だった。僕もその推測に概ね賛成であるが、父は伯母を軽い女だとでも言うように「過去の恋人たちから」という部分を強調していたが、僕は友人からの土産であることを強調したい。とは言っても、単にそうであってほしいと思うだけで、具体的な根拠はない。伯母のよく見せてくれる世界の写真は自分の写っていないものばかりで、そのほとんどが絵葉書だった。

両親が共働きだった僕は、よく伯母の住むマンションへ遊びに行った。学校から家には帰らないで、ランドセルを背負ったまま伯母の部屋に行くことも多かった。大抵、彼女はベッドで寝ているか、キッチンのテーブルに座って煙草を吸っていた。そして、日が暮れるとシャワーを浴び、化粧や服の準備をして、僕と一緒に家を出る。僕はそのまま誰もいない家に帰り、彼女は仕事に行くのだった。一度だけ「しごとって何してるの？」と聞いたら、問いにはいつもずばっと即答する伯母が少し立ち止まって考えてから、「嘘をつくこと」と答えた。それ以来、何となく仕事については聞きづらくなったので、彼女の話をつたえただけという役割になることが多かった。僕は疑問に思ったことを何でも聞いてしまうので、ときどき伯母を困らせてしまうからだ。

僕が自分のことを熱く話すこともあった。僕はライオンのように金色の髪になることにずっと憧れを持っていた。伯母とその話で何度か盛り上がった記憶がある。僕がライオンについて熱弁したあとはいつも、二人でドラッグストアに行って、イメージしているライオンに一番近い金髪に染まるものを選んで髪を染めたのだった。染めるたびに父は怒ったが、伯母と僕は「もうすぐ夏休みだし」とか、「みんな染めているよ」とか適当な言い訳をしては聞き入れられず、スポーツ刈りにされるのだった。僕は父親がゴリラでも、自分はライオンになれると信じていた。「鳶が鷹を生む」ということわざがあるくらいだから、それぐらいの奇跡が自分に起こってもいいじゃないかと伯母と二人で熱く語り合ったものだった。

そういえば、彼女がよく煙草を吸うので、ランドセルや服に煙草のにおいがついてしまって、学校の先生に喫煙行為を疑われたことがある。ちょうど伯母が僕の髪を金色に染めてくれた次の日だったので、教室の前にわざわざ呼ばれて、みんなの前で先生にクンクンと匂いをかがれるのはどうもばつが悪かった。そのあと、父が先生からその話を聞いて、僕と伯母を叱った。その頃、僕はまだ煙草を吸っていなかったのに、主に金髪の方に怒りの矛先が向いた。伯母は「髪を染めてはいけないという校則があるのは中学校からで、小学生は染めてもいいんだ」と主張したが、父は頑としてその主張を聞き入れなかった。伯母と僕が秘策として用意した黒髪ウィッグも、そういう問題ではないのだと言って許してくれなかった。結局、僕の金髪は一週間でスポーツ刈りにされてしまった。

僕が小学校を卒業してすぐに、両親が離婚した。そして僕は、もう何年もあっていない母のところに引き取られることになった。そして、母と母方の祖母のいる大阪に住むことになり、春からはその家の近くの中学校に通うことになった。僕が大阪に出発する前日に、父が携帯電話を買ってくれた。「何かあったら、いつでも連絡してこい」と言ってくれた。

僕はピカピカの携帯電話をもって、伯母の家に向かった。彼女は珍しく活動的に部屋を動き回っていた。どうやら荷造りをしているらしかった。長い髪を後ろで結んで、硬そうな耳がニョキッと出ていた。その耳は少し赤かった。「携帯電話、買ったんだ」と言うと、「そっか、もう一人前だ」と言って、アドレスと電話番号を交換してくれた。「メールは面倒だから、だいたい電話で済ませてね。あんたからなら、いつでも出るから」と言った後、「でもへんな時間に電話してこないでよ」と付け足して笑った。どこかに旅行にするのかと聞いたら、「水のきれいなところ」と即答した。そして、しばらく考えた後、「あと、嘘のいないところ」とも言った。「いない」という表現に僕が引っかかっていると、「嘘というのは、カワウソみたいな腹黒い獣な

のだ」と教えてくれた。都会は水が汚いので嘘が増えるというのが、伯母が導き出した結論であるらしかった。

結果的に、それが生きている伯母を見た最後で、僕が大阪行きの新幹線に乗っているときに父から電話が入ってきて、僕は猛スピードで故郷を離れていく新幹線の通路で、初めて電話越しに父の声と伯母の訃報を聞いたのだった。父の声が硬かったのは、電話のせいだけではないように思えた。

新大阪で母親と合流したときに、伯母の死のことを伝えて、すぐに故郷に返してくれと頼んだが、「とりあえずうちに来て荷物を置いていきや、おばあちゃんも家で待ってはるんやし」と言うので、そのまますぐにとんぼ返りというわけには行かなかった。母と母方の祖母はどうも伯母を嫌っているらしく、僕を伯母の葬儀に行かせたくないようだった。そのため、母が仕事に行った後もなかなか家から出してもらえなかった。何とか窓から抜け出して、なけなしの小遣いで電車に乗って故郷を目指したが、結局お通夜には間に合わなかった。新幹線に乗れるだけの小遣いがあれば間に合ったかもしれないと思うと、今でも悔しさがこみ上げてくる。

公民館に行くと、棺桶の前で父が線香の番をしていた。伯母の写真は、何だか嘘みたいにも通りの伯母で、涼しい顔をしてこちらを見ていた。その伯母の顔に死の気配や、悲しみの雰囲気は一切感じることはないのに、その写真を見ると何ともいえない寂しさを覚えた。それはカラー写真の遺影と黒い額縁の mismatch のせいだったかもしれない。そして、棺桶の窓から覗く伯母の顔は、学校帰りに伯母の部屋に入ったとき、ベッドで見かけたいつもの寝顔だった。すこし化粧の雰囲気が違うのは、その化粧が伯母の手によるものではないからだろう。祭壇にはたくさんの花が置かれていて、百合が強烈な匂いを発していた。それは紛れもなく本物の花の匂いだった。

二人で伯母の前に座って、線香番をしていたら、父がとうとうと伯母がいかにして死んだかを教えてくれた。伯母は僕が部屋に入ったときに荷造りをしていたスーツケースをガラガラと引き摺って、駅に向かっていった。彼女はその二日前に仕事を辞めていた。そして父にマンションの鍵を渡していたそうだから、本格的にしばらくどこかに行くつもりだったらしい。そして、駅前の筋の一本手前の大きな交差点の信号を渡っているときに、左折してくる車に轢かれたらしい。ほとんど即死だったそうだ。ちょうどその車がそのまま直進したら警察が検問しているのに出くわすとわかった運転手が、速度を落とさず強引に左折したのが事故の理由だ。その運転手は伯母を轢いて逃げた後、気が動転したのを落ち着かせるために酒を飲んだと供述している。しかも、その男が捕まったときには、ほとんど酔いがさめていたので、飲酒運転での立件は不可能なのだそうだ。「完全な逃げ得だよ」と父は言った。「嘘つきだった姉さんは、嘘に殺されてしまったんだ」と呟いた。僕は必死で反論しようとしたが、いい具体例が見つからなかった。

翌日の葬儀にも、母は仕事を理由に来なかった。朝、父に母から電話が入っていた。形式的なお悔やみを言った後、葬式が終わったらすぐに僕を母のところに帰らせるように伝えたようだった。葬儀屋に委託された葬式は、司会進行をすべて業者に任せてあり、親族はほとんど座っているだけでよかった。お坊さんがお経を読んでいるときに、伯母の棺桶の側にゆかりの品として置かれていた携帯電話が何度も鳴った。葬式が終わっても、電子制御の火葬場で伯母が骨になっていくときにも、骨壺に納まった伯母を父の実家につれて帰るときにも、何度も何度も伯母の携帯電話は鳴っていた。父は久しぶりに父の生家に帰ると、どさっと居間の机の側に座って、伯母の携帯をそっと開いた。

「みんな姉さんの死が信じられないんだ」

「嘘だと思ってる」「メールすれば返事が来ると思ってる」

「まだ届くような気がすると思ってる」「目の前で葬式していようが、骨を拾っていようが」

「それがすべて嘘なんじゃないかと思ってしまうんだ」

そうブツブツ呟くと、携帯を閉じた。

僕が大阪に向けて出発するとき、いつもの癖で伯母の部屋の前まで来てしまった。馬鹿みたいな話だが、伯母の死を伯母に報告しに来そうになったのだ。この向こうで、今でも伯母が暮らしているのではないかと思ってしまうけれど、もうその部屋には誰もいないのである。僕はドアノブに手はかけなかった。彼女がいるなら鍵は開いている。いなければ、閉まっている。それがわかるのが恐かった。

僕の人生から何かが抜け落ちていくのを感じた。それは致死量に近い喪失だった。帰り道は意図的に新幹線に乗らずに、伯母のことを思い出しながら電車で揺られていた。僕の携帯には伯母の電話番号とアドレスが入っている。僕は結局、彼女に一度も電話をしなかったことになる。彼女はいつでも電話しろと言っていたから、本当は今すぐにでも電話をかけて、幽霊でも奇跡でも嘘でも何でもいいから、彼女の声を知りたいのだけれど、僕は通話ボタンを押すことができなかった。「僕からの電話ならいつでも出てあげる」と言ってくれた伯母の言葉を、僕が電話することで「嘘」に変えてしまうのではないかと思った。

伯母は多くの人に「嘘つき」だと思われている。また多くの人にそう言われている。伯母は「嘘」をつくことが仕事だったからだ。でも僕に対して、「嘘」をついたことは一度もなかった。伯母が僕に話してくれたどのお話も、僕にとっては嘘ではなかったのだ。僕は伯母が大好きだった。彼女は今「嘘のいないところ」にいる。そこで僕からの電話を、首を長くして待っているのだ。